

雪嶋
悠

- ▼ ズィリェカ=イシュトゥルーム式外世界領域観測機所属報告書データベースへようこそ
- ▼ ログインしてください

- ▼ 認証完了。ようこそ、イシュトゥルーム技術少佐

- ▼ リクエスト受信中……
- ▼ 検索条件《Z-I 特異》に合致する結果 一〇〇件以上 を表示します

- ▼ Z-I 特異報告書《第〇〇八三番世界領域》を開きますか？

- ▼ しばらくお待ちください……

長針が12を指し、9を指す短針と直角を成した。見回りには気付かれていないはずだけど、それでも音をたてないように、暗い校舎を慎重に歩いていく。

街の中心部からはちよつと離れて、山の中腹くらいにあるこの学校の屋上に、部長がいる。わたしと部長で、天文部。たった二人の、天文部。

静かに階段を上る。上の階に行けば行くほど肌寒い。それはきつと、心が暖かくなっていくからだ。

階段を登りきると、窓のない鉄の扉が一つ。普段と違って閉まりきっていないから、隙間から風が小さな音を立てて吹き付ける。ドアノブに手をかけ、回す。押し込む。あまり重くはない。

夜空が見える。

来る途中は木が隠していた星々が、ちゃんとそこにいたことを知る。

来る途中は葉の間に漏れていた月が、欠けのない姿で浮かんでいることを確認する。

屋上の床は、ところどころ剥けて、雑草がタイルの縁に沿って薄く緑の線を作っている。何なのか分からない太い鉄のパイプ管を何本か跨ぐと、そこに、部長がいる。

「……部長」

「やあ、或葉。こんばんは」

声をかけると、声が返ってくる。わたしの詰まった声

は部長の澄んだ声に変換されて、おまけにわたしの名前まで付けてくれた。

そこにいるのは、すらっとした背に、黒く長い髪。すぐ横には大きな天体望遠鏡が凜々しく立っている。たった今組み立てが終わったばかりらしく、部品を入れるケースが散らかったままだ。

部長は、わたしが思うに学年一の美少女だと思ふ。馴れ合いを良しとせず、どのグループにも積極的に与しないそのさまは、当然同性受けしない。女子校だから浮いているのは確かだ。けれど、成績、美貌、ボディラインのどれをとっても上位にいる部長は、わたしが出会ったなかでも一番と断言していい。

部長は同じ学年で、去年は同じクラスだった。それも、入学式の時の出席番号順で隣の席だったのだ。でも、きつかけはわたしからじゃなかった。

あの日。友達出来るかな、まっとうに学校生活を送っていたら、まあ出来ないことはないだろう、と考えつつ、やはり漠然とした不安を抱えていた、その時だった。

「やあ、はじめまして」

隣から声が出た。よく通る澄んだ声だった。

「え、あ、はじめまして」

綺麗な人だな、と思った。そんな人に声を掛けられて、少したじろいだ。それを見て、その人はすく、

「そんなに言葉に詰まらなくてもいいよ」

と、わたしの心を確かにほぐした。

「う、うん」

そうして落ち着いてからその人を見ると、そこにはやはり、綺麗な人がいた。知っている言葉で形容するのが馬鹿らしいほどだ、そう思ったのを、確かに憶えている。

「いや、君？　でいいか？　君の名前が気になって。…いや、名簿に書いてあるから漢字は分かるのだけど、下の名前……『或葉』これは何と読むんだろう、と思つてね」

次いでその人の口から出たのは、わたしを知りたいという欲望だった。

「よく聞かれます。…あるは、瑞川或葉です。ギリシヤ文字の最初の字、アルファが、由来だつて聞きました」

そう言うと、その人は感心したように、

「なるほど。先駆者というわけだ。私はしゅん、だ。男の子の名前っぽいだろう、でも『春』の一字でしゅん、なんだ。氷川春。一気に女の子の名前っぽくなつたんじゃないかな」

そう言つて、白い歯を覗かせた。輝いていた。

*

部長が散らかったケースを片付ける間に、わたしは自宅から持ち出してきたあつたかいお茶とおにぎり、そして星座早見盤を、部長の用意した小机に並べた。これまた部長の持ってきたキャンプチェアに深く腰掛けて待つ。星座早見盤は部長が選んでくれたやつで、部長本人はそれと腕時計が一つになつた星座早見時計を愛用している。部長はその小さな文字盤を舐めるように眺めて、視線を天に向ける。立つ方向を少しずらしてから、また眼を下ろす。それを繰り返す。そうして、なにかある種の納得に至つたのだと思う、そちらの角度に望遠鏡を向け、肩を下ろしてわたしの所に寄つてきた。

「お、緑茶か。紅茶は無いかい？　お湯ならある？　貰

おう、日東のティーバッグを持つてる。使うかい？　あ、あそう。いやあ、いい夜だね。冷たい風、まるい月、そして街の明かり。文明が最も文明らしい時間。光は、目に見えない恐怖にかたちを与えてくれる。ま、観測には邪魔だけだね」

そう言つて微笑みかけてくる。その微笑を、月が引き立てた。

夜は深々と更けてゆく。やはりオリオン座が目立つから、今日は小ベルトが良く見えるとか、あの赤いのはいつになつたら超新星爆発を見せてくれるんだとか、いつかエリダヌス座をクルサからアケルナルまで全部一度に見てみたいとか、そんなふうになりオリオン座まわりのことを話していた。部長は基本的に一度夢中になると止まらないので、わたしがいるのを忘れたように望遠鏡とずつとにらめっこをしては、時折はつとした顔をして、さぞ申し訳なきようにわたしの方に来て、今ちようど何々座のガンマ星が良く見えるようになった、と言つてわたしの手を引く。夜風でも奪う事のできない暖かさがあつた。何回かそんなことを繰り返している間に、夜はどんどん深くなる。眠くて仕方ないから、もう普段なら寝ている時間なのだろう。時計を見るとこれ以上に眠気を招いてしまふような気がするの、もう見ないことにしている。

しばらくして、また部長がわたしをそっちのけにしている様子を微笑ましく見つめていて、ふと満天の星——ちよつとだけ見飽きたかもしれない——を見渡すと、

「あ、」

空から一筋の流れ星がすつと現れて、消えた。

ほんとうに一瞬で。何をもう暇もなく。

「何かあった？」

すぐにそう聞いてきた部長に、わたしは出来事を述べると部長は、流星群の日でもないのに運がいい、私も見たかったなあ、と悔やんでから、

「流星、か。お願いは出来たかい」

と聞いた。首を振る。残念なことに。

「だよねえ」

と言って、わたしに背中を見せて、フェンスの向こう、街の方向を向いた。そして呟く。それをわたしは聞き逃さない。多分聞き逃してほしいわけでもないのだろうし。

「三回どころか、一回言うのだって精一杯。それだけの短い命なのに、どうして美しいんだろう」

そうしてしばらく黙って——続ける。

「すぐ消えるから美しいのか、美しいからすぐ消えるのか。儚いものに希望を求めるなんて、刹那的で頹廢的だ

——これは少し言いすぎかな」

と言って振り返ると、きまりの悪そうに、苦笑した。

——部長は綺麗なのに消えないんですよ、嬉しいことに。

言いたかった言葉は、喉でつかえてしまった。

*

いつのまにか、わたしは眠っていたようだった。目を覚ますと、キャンプチェアにはわたしのものではないブランケットがかけられていて、部長はまだ望遠鏡の筒から飛び出した覗き口に目を重ねていた。部長はすぐに起きたことに気づいて、おはようと声をかけてくれた。

起きたころにはもう、遅いを通り越してむしろ早い時刻だったようで、朝焼けが近づいてしまうからと部長は割とすぐに片付けを始めた。わたしも手伝う。机の上を、寝ぼけまなこを擦りながらまとめ、タッパに残ったおにぎりを詰める。蓋をして肩掛けの鞆にしまう。

ふわあ。不意に突いて出た欠伸を呑み殺す。ひとおり片付いた机に見切りをつけて、部長の方へ行こうとする。

「ああ、或葉、すまないがそれ持ってきてくれ」

この鞆だろうか。手を伸ばす。

「それ。何も入っていないし、軽いだろ」

言われて鞆を手に取り、部長に向かって歩く。

その時だった。

屋上特有の剥げたタイルの縁。普段なら、観測を始めただけなら、何も考えずとも乗り越えられる範疇の。だが、運悪くわたしは寝起きだった。普段無意識でしか払わない注意を払うはずはなく。わたしの体は、止まった足先を起点に、前に投げ出されるかたちをとる。

あ、転ぶ。

そう思った時には重心は耐えきれないほど前であって、そしてそのまま自然の摂理通りに倒れ——

ぼふっ

「とと。危なかったな。怪我は大丈夫か」

——なかった。

わたしの身体は先輩の腕の中におさまっていた。当然、普段ならごめんなさいと言ってすぐに離れるだろう。でも、ああ、自分じゃない誰かって、こんなに柔らかかったつけ。こんなに暖かかったつけ。どうしてもそこを離

れることができなかった。それどころか、この暖かさを感じていたくて、両腕が部長の背中に伸びていった。

顔いっぱい暖かくなるのは、赤くなっているのか、部長が本当に暖かいからか。背中との温度差がひどくなくて、反射的に——至って反射的に、腕が締まる。華奢だった。腕が沈んで、懐抱が抱擁へと昇華しようとする。

心なしか、わたしを囲う部長の腕も締まった気がする。けれどその瞬間に、わたしは冷静になった。なってしまう。背中に現れた未知の感触は、わたしをぬるま湯から引き戻し、いまのはきつと幻影か、よくて偶然だったのだろうと思いつかぶ。腕をほどくと、部長の腕もほどけた。

「……寒かった、か？」

部長がわたしに聞いてくる。

何も言わず、何もせず。部長の一瞬が、わたしの千秋になっている。

じつと、部長の眼を見る。

吸い込まれそうに澄んだ茶色の眼。大きくて丸い。

視線が交錯して、絡み合う。

見ている眼が見ている。静謐を汚さぬよう、そこにはそれしかなかった。

「え、ん、どうしたんだい、或葉」

部長がやや困惑気味に言う。それでも、お互いに視線がそれることはない。だから、いっそ、言いたいことを言ってしまうおうか、と思った。

「あの、部長——」

すぐには言えなかった。

怖いから？

すぐにでも言いたかった。

誰かが応援してくれているような気がして。

でも、変わらないでいてほしいから。

そっと胸にしまって、静かに鍵を、かちやり。

今は、ただ、見つめていたいのだ。

部長の瞳が月とわたしをたたえている間に。

今は、ただ、一緒にいたいのだ。

暁がわたし達を照らしてしまうまで。

《メモ》

この世界領域でもまた、出逢うようだ。

未だ観測が進んでいないが、ハッピーエンドになってくれるだろうか。

——ハル・イシュトウルーム、統一歴 283 年 10 月 20 日